

2024.4.18

◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇

地域日本語支援ニュース こだま 第 442 号

ともに生きる

～地域で、日本で、そして世界で～

◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇

★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース 「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部： <https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html>

---

---

新年度のごあいさつ

公益社団法人 国際日本語普及協会（AJALT）

理事長 戸田 佐和

4月3日に台湾東部で発生した地震により犠牲となられた方々に対し、謹んで哀悼の意を表するとともに被害に遭われた方々に心よりお見舞いを申し上げます。

東京は、桜の開花とともに2024年度4月1日を迎えました。

いつもメールマガジン『こだま』をお読みいただきましてありがとうございます。

こだまは、読者のみなさまの、温かいご支援に支えられ21年目のスタートを切ることができました。

この一年も地域でそして海外で活動されている支援者の方々、日本での生活を切り開いている方々の生きる力があふれるご寄稿をいただき、勇気づけられました。心からお礼を申し上げます。

能登半島地震発生から3か月が経ちました。

まだ、多くの方々がお住まいや水道、電気の復旧が追いつかず不自由な思いをされていることと存じます。一日も早く落ち着いた日常が戻ることをお祈り申し上げます。

地震が発生し、数日経ったところです。ようやくたどり着いた避難所で知合いの日本人に再会し、ほっとしたというブラジル人のお話がニュースで紹介

介されていました。一方で、技能実習生の中に地震直後、情報が得られず、一時的に孤立状態になっていたグループがあったということを知りました（『こだま』441号にも掲載）。また、避難所に身を寄せたものの、食べられないものもあり、自主避難したという話も聞きました。

このような状況から、私は、ともに生きる中で、今一度、防災について「ともに」考えなければならない時期が来ていると感じました。明日起こるかもしれない災害に備えて手を取り合って防災を考える場の必要性です。これまで多くの自然災害の経験から、自治体やNPOの方々によって災害時に情報が正しく届くよう、また、防災の意識を高めるよう取り組みが進められてきました。「わかりやすい日本語」で書かれたパンフレットもできています。

しかし、その取り組みには地域差があるように思いますし、せっかくパンフレットが用意されていても、届かない、読まない場合もあります。安全に生活できるよう今後は、ぜひ国の主導の下、全国どこにいても来日直後に防災教育を受ける環境を作る、多言語情報を被災者が確実に受け取れるシステムを整備してほしいと思います。整備にあたっては外国人の視点も重要です。避難訓練や避難所の運営は、現在各地で誕生している外国人防災リーダーを中心に、地域住民を巻き込み、言語・文化の違いを想定し、考えられるべきです。

このように外国人の視点を取り入れることは、防災だけではありません。町おこし、交流、子育てなどさまざまな場面で何かを進めていくときに、異なった分野の人たちが集い、意見を交わすことで、新しい発見や変化が生まれると信じています。ともに日本を支える一員として話し合いができる輪がどんどん広がっていくことを願っています。

今年度も引き続き、テーマは「ともに生きる～地域で、日本で、そして世界で～」です。これからも『こだま』で読者のみなさまの地域でのさまざまな取り組みが共有され、他の地域の参考になればと願っています。ぜひ、原稿をお寄せください。

最初にご紹介したブラジルの方のお話は、不安が安堵に変わったときの気持ち伝わってくるものでした。みなさまの活動がそこに集う方々にとって大きな支えになっていることを痛感しております。

世界情勢はますます混迷しており、伝わる報道に胸を痛める日々です。

対話による停戦が実現し、ひとりでも多くの命が救われることを祈ります。

---